

# あの青を見たか

中村綾子

「……はあ……はあ」

海を左手に、一歩一歩、坂道を踏みしめていく。大した傾斜ではないはずだが、日ごろの運動不足が祟ってか、ほんの少し上っただけで息が切れる。真夏の日差しも手伝い、汗がとめどなく流れる。まったく、今日は散々な日だ。

営業回り中ふと思いつき立ち、出雲市駅前発のバスに飛び乗ったのは二時間前のこと。出雲大社経由、日御碕行き。終点の日御碕は島根半島のほぼ西の端にあたる。切り立った崖と海が綺麗だということ聞いたことがあるが、実際に行ったことはない。

就職三年目までの離職率がどうこう、という話は、就職活動中から何度も耳にしていた。実際、就職三年目を迎えて少し経った今、その話が身に染みて理解できた。

地元企業だから、と安易に選ぶべきではなかったのだ。人と接すること自体は嫌いではないはずだった。学生時代ずっと続けていたアルバイトも、居酒屋のホールだった。ずっとやっていたおかげか、細かい気配りが嬉しい、と言ってもらえることもあった。

だからこそ選んだ営業職、のはずだった。

会社の仲間となじめず、営業もうまくいかないことばかり、お客様に怒られることも少なくない。どうにか自分なりの方法を探そうとするが、何をやっても失敗ばかりで、上司からも叱られ続けの毎日。

もう、やめようか、と思った。

そして今朝、とうとう仕事を投げ出し、バスに乗り込んでしまった。まったくもって間抜けな話である。

しかも、バスは超満員。おまけに、ほんの少し進んだ

先で、とてつもなく長い渋滞に巻き込まれた。

それもそのはず、出雲大社は今年、大遷宮のフィナーレにあたる本殿遷座祭が行われたばかりで、観光客が山のように押し寄せているのだ。出雲大社経由なら、こうなることは簡単に予測できたはずなのに、何も考えていなかった。

そして、本来の予定から大幅に遅れて、バスは日御碕へと辿り着いた。かなり疲れはしたが、普段の仕事よりはマシだと思えた。

「……でも……これはさすがにきついな」

少し急になってきた坂をゆっくりと上がりながら、一人呟いた。バスを降りてすぐの案内板を見る限り、そんなに長い道のりではなさそうだったが、思っていたより時間がかかっている。

あと、どのくらいあるのだろう。目の辺りに流れてくる汗を拭きながら、顔を上げた。

「……あ」

茂る木々の向こうに、真っ白な灯台の頭がひょっこり見えた。

日御碕灯台。確か、建設から百年以上たった今も現役で動いている、石造りの灯台だ。太陽の光を受け、その白がまぶしく見えた。

はっ、と足が止まっていることに気が付く。灯台が見え

たのだ、もうそろそろ日御碕に着くということだろう。

止まっても仕方がない、と歩き出す。

幸い、坂の勾配はここから緩やかになっていた。ゆっくりと歩を進めていくと、小さな商店街のようなところに出た。商店街、と言っても、貝殻やちよっとしたお土産を売っているお店が五十メートルほどの間隔でぽつりぽつりと並んでいるような、のどかすぎるほどのものである。

驚いたのは、思ったよりも人がいるということだ。夏休みだからか、子供連れの家族も多い。観光地として紹介されているのは知っていたが、ここまで人がいるものだとは思わなかった。

そうかと思えば、近所の人らしい、犬の散歩をしている人なんかもちろほら見かける。なんだか不思議な光景だった。

そこからまた少し歩くと、公園の入り口のような小さな塀が見えてきた。先ほどから、ずっと頭だけ見えている灯台には、始めより大分近づいてきている。とはいえ、高さのせいだろうか、まだまだ小さくも見える。なんだか距離感が掴みにくい。

海が見えるまでにはまだ時間がかかるのだろうか。かかるようなら、もう引き返そうか。そう思いながら、門のようになっている塀の間を抜けた。

——瞬間、目に飛び込んできたのは、鮮やかな色。

先ほどから見えていた灯台は右手にその全体を現し、目が眩みそうなほどの白い輝きを放っている。左手には、太陽の下、青々とした葉を揺らす、緑の松林。頭上には突き抜けるような夏の空。そして、ここから正面に続いている道の先、崖の向こうには、その対極にあるような、穏やかで静かな深い海の青。

一瞬、うまく認識できなかった。

ここが、日御碕。  
しばらく、その場に立ちつくし、ただその風景に、その色に圧倒されていた。

人々の話し声と風の音の中で、驚くほどゆっくりと時間が流れていく。

——あの海を、もつと近くで見たい。

そつと、一步を踏み出した。道なりに、海に近づける林の方へ向かってみる。

少し下りると、道に沿った柵の向こうが崖になっていた。かなりの断崖絶壁だが、崖の下がどうなっているのか覗くことはできない。

もう少し林の方へ近付くと、崖の上に立てるようになっていた。崖の先には柵も何もなく、うっかり足を滑らせようものなら、あの青い海へ真つ逆さまである。

崖の上には先客がいた。様子を見る限り、大学生の集

団のようだ。崖の上から恐る恐る下をのぞきこんでは、悲鳴を上げて安全なところまで慌てた調子で戻ってくる。

実質、数年しか歳は変わらないはずなのに、彼らが随分と若く、無邪気に見えた。

「うわー、これ落ちたら一発で死ねるぜ」

彼らのうちの一人が言ったその言葉が、なぜだか強く印象に残った。

彼らが去った後で、崖の上でみた。思っていたより風が強い。しっかりと踏ん張っていないと、そのまま吹き飛ばされてしまいそうなくらいである。

それでも、崖の上から見る海の青は、先ほどにも増して深く、魅力的だった。

——もつとよく、あの青を見たい。

膝をついて、ゆっくりと、崖の下を覗いてみる。

陽の光を映して光る、海の青が見えた。真上からだと、海の中の岩まで見えて、どれほどこの海の水が澄んでいるのかがよくわかる。

人を吸い寄せるような、青。

深く、それでいて澄みわたっていて、どうしようもなく人を引き込む、青……。

目を、離せなかった。

その青が、目を離すことを許さなかった。

もはや、ここがどこなのか、どこにいて、何をしよう  
としているのか、考えられなかった。

その青に触れたいと、強く、そう思った。

——ただただ、その青に触れようと、精いっぱい、手  
を、伸ばした。



## 創作ノート

### 作品の舞台

作品の舞台となっているのは、日御碕（島根県出雲市  
大社町日御碕）。

初めて出てくる出雲日御碕灯台は、海面から灯塔の頭  
上まで六三・三メートルと日本一の高さを誇る、石造り  
の灯台である。作中でも少しふれた通り、建設から百年  
以上経った今も、現役で活躍している。

景勝地としての日御碕は、大山隠岐国立公園に属してお  
り、遊歩道沿いに海食によってできた断崖絶壁が続く。

ここを舞台に選んだ理由は、日御碕を訪れた際、作中  
同様、景色が開けた瞬間に、一気になだれ込んできた色  
の美しさに感動したためである。

今回は、この日御碕の景色の美しさを、情景描写で伝  
えることを重視し、字数を割こうと思っていたが、苦手  
な分野のため、あまりうまくいかなかった。

### 登場人物

基本的に、登場人物と呼べる人物は主人公と大学生の  
集団ぐらいである。

先に大学生の集団について述べると、彼らのうちの一人  
が発した言葉は、現地で実際に聞いたものである。実  
際は大学生ではなかったのだが、主人公の境遇と、馬鹿

をやっている雰囲気を出して、この後の主人公の行動との差別化を図るために、大学生という設定にした。

実際、日御碕は自殺の名所としても知られている場所のようで、心霊スポットとして紹介しているホームページもいくつか見つけることが出来た。

肝心の主人公だが、最終的に性別の設定をしていない。これは偶然の産物なのだが、途中まで書いた時点で一人称が全く出て来ず、それならこのまま書き進めてしまおう、とそのまま書ききってしまった。

結果的に、読者にとっては性別に関係なく、感情移入しやすいようになったのではないかと考えている。

ちなみに、始めは男性を想定して書いていたのだが、このような形式をとるにあたり、できるだけ性別を感じさせるような表現を避け、なおかつ、最後以外は曖昧な表現になってしまわないように、という点に気を付けながら執筆した。

主人公の仕事がうまくいっていない、という設定は、ひよっとすると、この主人公は最後に死んでしまうのではないか、という予感を読者に与えたいと考え、付けた設定であったが、あまりうまく活かせなかったように思う。

## 物語の最後

あえて最後、主人公がどうなったのかは曖昧にしてある。

この主人公の行動自体は、崖の上から見たわけではないが、実際に見た海があまりに綺麗だったことから思いついた展開である。

ここからは個人的な話になるが、私は高い場所から下を見ると、何となく下に吸い込まれていきそうな感覚を味わうことがある。同様に、深い水を見ていても、そのような感覚を味わうことがある。それならば、崖のような高いところから海の水面を覗き込むとどうなるのだろう、と考えて、このような形になった。

青、という色に執着しているのは、始めに目にした海の深い青が強く印象に残っているからである。

— なかむら・あやこ 日本文学科四年生 —